
～ 漣の旅～（ポケモン達の旅）

幾斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～漣の旅～（ポケモン達の旅）

【Nコード】

N2387S

【作者名】

幾斗

【あらすじ】

とあるポケモン達の話

レンとポケモン達の楽しくて笑える話です（笑えるかな…）

あらすじ書くの苦手…

キャラ紹介

作者の幾斗と申します

え〜と

はじめての投稿になるのでぐだぐだなのは…気にしないでください
内容はポケモンを書いていきます
読んでいただくととても嬉しいです
感想とか書いてくれると涙流して喜びます…

では

作者の自己紹介はこれぐらいにして
次はキャラ紹介を書いていきます。

キャラ紹介

（ネタバレ注意）

レン（漣）男 17歳

家の家計が普通よりもよく

なぜかレンだけが波動を使える

家族のみんなはレンが波動を使える事に気づいてない

好きな事散歩

嫌いな事ひきこもり

雨の日とか

ルカリオ ♀

レンの心良きパートナー

たまごの頃から育てられていたのでレンの事はよくわかる

レンの事は「レン様」と呼ぶ

好きな物はチョコレート

嫌いな事は独り

後に会うポケモン

エンテイ ♀

（本当は性別不明だけど性別つけちゃいます）
後に会う

性格は気高く独りでいるのが好きだが
レンと会った時からレンのそばにくっつきっぱなし
実は恥ずかしがり屋

ライコウ ♂

後に会う

唯一伝説でも違和感がない一匹
伝説なのかレンは疑問に思っているとか
レンの事は「レン殿」と呼ぶ
伝説なので唯一のツツコミ担当
実は暗い所が嫌い

スイクン ♀

気品溢れるお嬢様な見た目とは反面
実はそれは外の顔
レンには甘えっぱなし
よくライコウに怒られる
レンの事は「ご主人」とか「ご主人様」と呼ぶ
嫌いな物はライコウ
好きな人はレン

すごいキャラ設定…

ライ「やっていけるのか？」

多分……

三匹「……………」

漣の旅（準備編）

チユンチユン……

小鳥のさえずりを聞いて目を覚ました

俺の名前はレン（漣）波動使いだ

昨日親に言われたんだが…

なんだか寝ぼけてるせいか

何を言われたか忘れてる。

「レンー！！

起きたの〜？」

一階から母の声がした

時間を見ると七時半

ちよつとばかり寝坊だった

「起きたよー！！

今下に行くよ」

返事をしてベッドから降りようとすると

足にやわらかい物が触れた

「……………ルカリオ…」

またこんなところで寝てたのかと言いたげな顔をした

ルカリオは目をこすってあくびをして

「……………あつ、レン様おはようございますー！」

とあいさつをした

ちよつとばかりルカリオが可愛いと思ったのは内緒にしておこう。

それから、服を着替え

一階にルカリオと一緒に降りていき

「母さん…」

またルカリオ俺の部屋に寝せたでしょ…」

「あら？」

お母さん悪い事したかしら？」

「……………」

レンはため息をつき

食パンを食べた

ルカリオはジャムパンをおいしそうに食べていて

それが可愛く見えた

「…………レン様？」

私の顔に何かついてますか？」

ルカリオの顔を見ていたのが気づかれて少し慌てたが

「いや…鼻の頭にジャムが…」

と、ちょうど鼻の頭にジャムがついているのを見つけて指摘した

ルカリオは顔赤くしながらタオルでジャムをぬぐった

「ごちそうさま…」

「ごちそうさまです…」

ルカリオとレンが朝食を食べ終わり

いつも通り森でルカリオと朝の修行をしようと支度を整えていた。

「あつ、そういえばレン

今日あんたお昼に旅にでるんじゃないかったの？」

母さんに言われた一言でようやく朝思い出せなかった事が思い出せた

「……………そういえば…そうだったな…」

思い出せたなかった物が思い出せたのでスッキリしていたが

なんでそんな事になったかは思い出せないままだった…

「母さん…」

なんでそうなったんだっけ？」

母さんに聞いたら

「レン様覚えてないんですか？」

昨日の夜世界を見て回りたいつて言っただじゃないんですか」

ルカリオが俺に教えてくれた

「そういえば…」

言っただなあ」

昨日の夜、世界はどうなっているのだろうと気になり

旅に出てみたいと言ったら

母さんがあっさりオツケイしたんだっけな

と、思い出していた

「ルカリオ…今日はいい天気だなあ」

「はい！」

とても天気がいいです！」

他愛もない話しをして

朝の修行のために家を出た

湖に着くといつも通り岩の上に座り

目を閉じてあたり波動を調べてた

「ん……」

知らない波動が三匹……」

とても強い波動を感じて目を開く

「レン様……」

ルカリオが不安げにレンを見る

「大丈夫

今までいつも二人で修行してきたんだから」

ルカリオを安心させ

また周りの波動を調べる

さっきの強い波動はこちらに近づいて来てるようだ

（これほど波動が強いとは…相当手ごわいな…）

バトルになった時を考えて

どう対象するかを考えはじめた

「……………来るぞ」

ルカリオの方を向いて小声で言うと
森の中から出てきたのは

(…!!)

あれは…)

そう出てきたのは

エンテイ、ライコウ、スイクン
であつた。

「まさか伝説の三匹だとは…」

レンは伝説の三匹を見て少し驚いていたが
波動で敵意がない事を確認した

「ルカリオ…どうやらやる気はないらし…」

「はい…」

ルカリオは驚いていた

伝説の三匹は話しでは聞いた事があるが
会ったのはこれがはじめてだ

するとライコウがこちらを見て歩いてきた
敵意はない

だがまだ安心はできない

「……おまえはレンか？」

いきなり問われた質問に返事が遅れた
「…えっ？」

「おまえはレンかと聞いている」

なぜライコウが俺の名前知っている

その事で頭が混乱しかけたが

「ああ…俺はレンだ」

冷静を保ち答えた

「こんな若い奴が波動使いとは
恐れ入る」

ライコウがニコツと笑い

後ろにいた二匹を呼ぶ

「まあ…言わずとわかっていていると思うが
俺の名前ライコウ」

「スイクンよ」

「エンテイだ」

と、三匹が自己紹介をしてきた

「伝説の三匹が俺になんの用だ…？」

少し警戒気味に聞き

「…お前聞いてないのか？」

じいさんから

じいさんと聞いてはつとした

俺のじいちゃんは去年亡くなった

そしてじいちゃんが亡くなる前に言った言葉が

『レンや…あと一年たったら旅に出なさい…』

そして心強き者が現れる

もちろん仲間だ…

じいの古い仲間だ…

それじゃあ…気をつけるんじゃぞ……………」

「あの時の話し…」

おまえ達の事だったのか…」

そう言ってその場に崩れ落ちた

く連の旅く（仲間く旅立ち編）（前書き）

いんやあ…

スイクン「あつ、作者だ」

おやスイクン

いまね思っただけど

スイクン「小説なのに一話一話が短いって？」

うつ…！

そうなんだよ…

スイクン「まあいいじゃない
って事で本文どーぞ」

く漣の旅く（仲間く旅立ち編）

ライコウ達の話してじいちゃんの昔の話を思い出し
十分ほど泣いていたレン
ルカリオが頑張って慰めて
ようやく泣き止み
涙をぬぐう

「ライコウ…

おまえ達は俺の仲間になるんだよね？」

レンはライコウ達に聞いた

「ああ、まだまだ未熟な孫をよろしくとじいさんに言われているかな」

ライコウはそう返答し

後ろでスイクンが笑っていた

なんだかじいちゃんが余計な事を言ってくれたようだ。

「はあ…じいちゃんの余計な事はいい…

さて…仲間になるんだったらモンスターボールに入れないとな」

昔、じいちゃんが残してくれたモンスターボール

三つしかないという事はじいちゃんはこの先の出来事を予想していたんだろ…。

「ええ、モンスターボールの中は嫌いだけど

「ご主人の仲間になるには入らないとね」

スイクンが先手を切ってモンスターボールの中に入る
数秒して点滅が消えてゲットできたという事になる。
続いてエンティが

「よろしく頼むぞ」

そう言って入っていき
最後に

「世話になる」

と、ライコウが入っていく

もちろん二匹とも抵抗はしないので数秒の点滅でゲットできた

「まさか…仲間が一気に三匹も…
しかも伝説とは…」

ゲットできた事に夢でも見てるんじゃないかと思
いルカリオに頬をビンタしてもらった

「痛いな…夢じゃない」

空を見上げてから近くの時計台をみる
時刻は十一時半

「……帰るか」
「はい！」

ルカリオと一緒に家に帰った

昼飯を食べて

旅に向けての支度を一通り終わらし
窓の外を見た

「……ちゃんとやっていけるかな」

そんな事をつぶやき

近くにいたルカリオを撫でた

それから家を出ようとドアを開けようとすると

「頑張つてやっていきなさいよ！」

と、母さんに背中を押された

「ああ…母さんも元気だな！」

最後ばかりは元気よく返事をした
家にはグラエナがいるから大丈夫
そんな事を思つてレンの旅は始まった…

く連の旅く（仲間く旅立ち編）（後書き）

スイクン「私たちようやく仲間になったわね」

ライコウ「ああ、バトルするきはサラサラないからな」

エンテイ「したかったなあ…バトル」

その若干一匹

うるさいよ…

エンテイ「バトルさせてくれ」

だが断る

もうちょっとまてい

エンテイ「了解した…」

ゝ漣の旅ゝ（旅路）（前書き）

いやあ…

遅くなっちゃいました…

スイクン「まったくよ！

わたし達の事忘れたのかと思ったわよ！」

ごめんごめん

古いパソコンとちょっと…

スイクン「古いパソコンって、どのくらい古いのよ？」

1998年物

スイクン「うわあ」

まあ

これからも更新していきますんでよろしくです

「よろしくね！」

では本編へ…

スイクン可愛いよ

スイクン「／／／／／」

く漣の旅（旅路）

ようやく家を出て旅にでた

長かったような短かったような家の生活
思い出が沢山詰まった自分の部屋とも別れ

「ルカリオ…頑張って行こうな」
「もちろんです！」

ルカリオはいつも通りニコニコ笑って返事をした
ルカリオの頭を撫でてとりあえず
目的地を決めるために地図を開いた

「ここから近いところは………」
「うーん…」

キキョウシティでしょうか…？」

二人で考えていると
モンスターボールからスイクンが出てきた

「キキョウシティに行くの？」

「ああ、ここから近いキキョウシティに行こうと思う」

スイクンはニコツと笑うと

「ご主人の言うとおり」
「キキョウシティが一番近いわね」
「……スイクン…」

ところでなんで出てきた？」

「えっ？」

もちろん、モンスターボールは窮屈だし…

ご主人のそばにいたいからよ」

スイクンの顔が赤くなったのはきつと気のせいだろう

「そうか…

ただでさえ目立つんだから…

あまり外に出ないでくれよ」

「うゝ…

ご主人の意地悪…」

そう言っているとスイクンは顔を伏せて目を閉じた

伝説の自覚はあるのか気になった

「スイクン…

とりあえずモンスターボールに…」

「嫌よ」

断られた

しょうがないから外に出したまま目的地に進む事にした

森の中を歩いて新鮮な空気を味わい

旅もなかなか良いものだ

結構歩いたが

さすがに一日でキキョウシティには着かなそだし日も落ちてきたので

今日は川の近くで野宿する事にした

「けっこうキツいなあゝ

旅立ってわかるここのキツさだなあ」

ちょうど腰を掛けるのにいい石に座り
背中を叩いた

まだ旅立って間もないのに体が応えてる

「ご主人…大丈夫？」

スイクンが心配してきたのか
すりよってきた

「ああ…」

旅は始まったばかりだから
早くなれないとな」

スイクンのたてがみを撫でてやる
ふかふかして撫でるのが癖になりそうだ

「ご主人…くすぐりたいですよ」

撫ですぎたのかスイクンがくすぐったそうにしてた

「悪い悪い

スイクンの毛並みがよくてな」

笑いながらまだ撫でる

「もっ…」

スイクンは顔を赤くしてそっぽをむいた
川の流れを眺めて旅にでて良かったと思うレンだった…

「ふう…」

今日はもうねるか…」

そう言いスイクンのふかふかたてがみを枕にして眠りについた…

- - 次の日 - -

いつも通りの時間に起きたはずが

9時になっていた

どうやらスイクンのふかふかたてがみ枕が良すぎたのだろう

「……………さてと

今日もいい天気だなあ…」

あくびをして背伸びをし

枕にしていたスイクンを起こす

「スイクン起きろ」

「うふふ…ご主人」

すごい甘ったるい声だった…

「寝ぼけてないで起きろ…」

「うゝん…ふあっ！

ご主人！？」

ようやく起きたスイクン

反応がかわいい…

なんでもないです…

「早く顔洗ってこいよ…」

「…はい」

スイクンは顔を真っ赤にして川に向かった

川から戻ってきたスイクンはしばらく黙ってた
そうとう恥ずかしかったんだろう

「スイクン…？」

「……………」

「スイクン……？」

「……………」

「スイクン！」

「はひっ!？」

スイクン…

かわいすぎるからやめてくれ…

「はううう…」

「………… スイクン？」

「なんでしょうか…？」

スイクンは顔を赤くしながらこっちを見た

「いや…」

朝さ、なんの夢見てたのかなあって…」

「……………!?!」

ボンっとか音がしてきゅーとか言いながらスイクンが倒れた…

「……………」

「レン殿…そつとしておいてやろう…」

「うわっ!？」

ライコウいつのまに…?」

「さっきからずっといたんだが…」

ライコウが自分から外に出てくるのは初めてだったからびっくりしたレンだった
なんやかんやしてたら10時になってたのでちょっと遅い朝飯を食べた

「レン様…スイクン様はどうしたのですか?」

「わからない…」

「ルカリオ殿…女の子にはよくある事だ…」

「?」

ルカリオの頭の中は「?」が浮かんだ
朝飯も食べ終わり出かける準備をしていると
スイクンが復活したようなので
スイクンに残しといった朝飯をあげた

「ありがとう…」

若干顔はまだ赤いが大丈夫だろ
支度も整い出発しようとして
伝説二匹を外に出したままだとまずいので
戻そうかと思い

「ライコウ、スイクンモンスターボールに…」
「嫌よ」

「外の方がいい」

と二匹に言われたので
出したまま行く事にした
森の中を歩いているが
野生のポケモンに合わない…
なぜだろうと思ってた

「なあ…野生のポケモンでてこないな」
「それは我々がいるからだと思うぞ」

納得した

キキョウシティにつく途中にトレーナーとバトルしたいと思ったが
…無理そうだな…
とりあえず二匹にモンスターボールに入るように説得した

「…なあ、モンスターボールに入ってくれないか？」
「なんでよ？」

「なぜだ？」

「トレーナーとバトルができないんだよ！」

「…ああ…」

二匹は納得した…が
戻ってくれなかった…

キキョウシティ間近になると
トレーナーが多くなってきたような気がする

「さすがにバトルしてくれないよなあ……」

そんな事を思っていると

「その君

相手をお願いしていいかな？」

予想もしてなかった

涙が出そうだった

「はい！喜んで！」

（レン殿：そうとうバトルしたかったんだな……）

（そうみたいね……）

「じゃあお願いしますよ」

バトルを仕掛けてきた

川岸で釣りをしていた男はギャラドスを出してきた

「ギャラドスかあ……」

……………ライコウ行ってこい」

「御意に」

相性で言えばライコウが優位に立つ

「手加減なしだからね！

ギャラドス、ハイドロポンプ！」

相手のギャラドスはハイドロポンプを繰り出してきた

うゝん…当たってもライコウにとつち蚊見たいものか…

「ライコウ、かわして10万ボルト!」

「御意!」

ライコウはハイドロポンプを寸前でかわして
10万ボルトをギャラドスにくらわせた

「あちゃゝ」

戻れギャラドス」

相手はギャラドスを戻し

「レン殿…手加減ほんとししないですな…」

と、ライコウがぼそつと言った

「…あまり使いたくなかったんだけどな…」

相手にもやはり隠し玉はあるらしい
こっちはあつてないようなものだけど…

「行け!ブーバー!」

えっ?

釣り男がなぜブーバーを…?

「…戻れライコウ…」

「御意」

まあ…気にしない気にしない

「行け！スイクン」

「やっとあたしの出番ね！」

スイクンは体を伸ばし
軽くジャンプした

「先手必勝！」

ブーバー、火炎放射！！」

火炎放射って…

こっちは水タイプなのに…

「スイクン、かわして冷凍ビーム」

「わかったわ」

スイクンは火炎放射をひらりとかわして冷凍ビームを放つ

「同じでは何度もくわないよ！

ブーバー、かわしてオーバーヒート！」

おお、オーバーヒート覚えてるのか
とか思い、

「かわして、絶対零度」

スイクンはオーバーヒートをよけて
瞬時にブーバーの後ろに回り込み
絶対零度を放つ

さすがによけきれなかったのか

直撃した

「ブーバー！」

…俺の負けだ…」

初バトルは普通に勝った

てか伝説三匹持ってれば当たり前っちゃ当たり前か…

「スイクンお疲れさま」

「大丈夫よ

いい運動になったわ」

スイクンは機嫌がよく

ニコニコ笑っていた

「ライコウもお疲れさま」

「レン殿、楽しかったですな」

ライコウも機嫌がよかった

むしろ機嫌が悪くなる事はあまりないだろう

とりあえず釣り男とあいさつを終えて

キキヨウシテイに向かう

「さて

いよいよキキヨウシテイだ！」

「ええ」

「ああ、簡単についたな」

ゝ漣の旅ゝ（旅路）（後書き）

スイクン「／／／／」

どうしたの？

顔赤くして？

スイクン「なつ、何でもないわよ！／／／」
？

まあいいや

次の更新は未定かなあ…

とりあえず放置はしないけどねゝ

スイクン「したら恨む」

やめて…

怖いから…

スイクン可愛いから

スイクン「／／／

わかったわ…やめてあげる／／／」

………

うんスイクンは可愛い！

スイクン「／／／／」

スイクン顔赤くいよ？

スイクン「なななんでもないわよ!! / / /」

?

では次回をお楽しみに!

スイクン「お楽しみに / / /」

スイクン結婚してくれ!

スイクン「 / / / / / / /」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2387s/>

～ 漣の旅～（ポケモン達の旅）

2011年10月8日22時48分発行